

観光論における「環境の概念」の特徴と変遷に関する研究

近藤 紀章

1. 研究の背景と目的

近年、政策としても研究対象としても観光に対して、まなざしが集まっている。この現状をふまえて、本研究では、「環境の概念」が観光論文において、どのように扱われてきたのか、両者のかさを調べる。これによって観光論における「環境の概念」の多様性や特異性および、「環境の概念」の変遷が年代別に明らかになる。さらに、今後の観光研究に対する展望に関する知見を得ることができる。

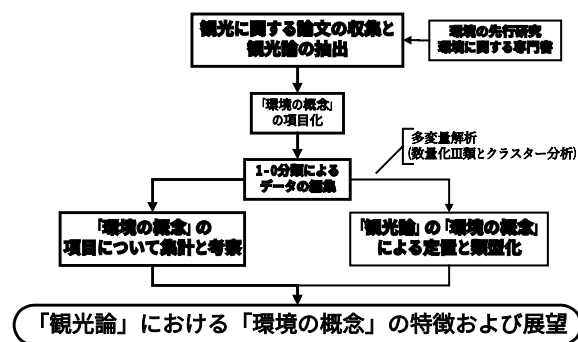


図1 研究のフロー図

2. 研究対象

観光論における「環境の概念」について調べるため、本研究では、サーベイ論文の手法を用いる。そのため、観光論を抽出する対象を、論文集、雑誌とし、出典はこのように定めた。

- ・ 観光関係の学会
- ・ 観光学部の紀要
- ・ 観光関係の専門誌

また、これらに記載された論文のうち、「環境の概念」を抽出する対象を、研究ノートを含め、研究論文とした。さらに、対象となる論文の選定基準を以下の四項目に定めた。

- ・ **論文の公共性**: 論文の掲載されている論文集や雑誌が公表されているかどうか
- ・ **時間的基準**: 論文集の創刊された年から 2001 年 10 月までに発行されたもの
- ・ **論文の分量**: 論文の枚数が極端に多すぎるもの、要旨でも 2 枚程度の論文はさけ、4 から 10 枚の間を適量とする
- ・ **表記言語**: 日本語で書かれた論文を対象とした

以上の選定基準から、以下の 197 本の論文が対象となった。

表1 論文集のタイトルと所載論文数

論文集のタイトル	論文数
旅の文化研究所 研究報告	20
観光に関する学術研究論文 入選論文集	44
大阪明浄大学紀要	16
立教大学観光学部紀要	42
立教観光学紀要	12
日本国際観光学会論文集	11
観光研究	52

3. 観光論における環境の概念の抽出

「環境の概念」を抜き出すために、「環境の概念」の項目化をおこなう。環境の概念に関する先行研究¹より、環境の概念には包括的な概念が存在することが明らかとなった。また、末石²による

- ・ 人間環境系
- ・ ホモ・シグニフィカンス (homo significance)

および、青木³による物的環境の知覚による評価を参考にして以下の図が得られた。

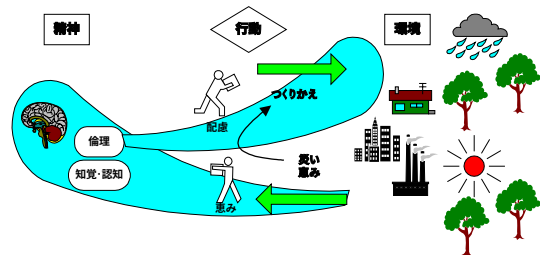


図2 精神-行動-環境の三者間の関係図

この図を参考にして、「環境の概念」を以下のように項目化する。

I. 基本概念→基本概念

先行研究¹にあるように、「環境の概念」に関して包括的に説明する概念を基本概念として取り上げる。

II. 人間の行動→環境の身体性

人間の行動としては、環境知覚・認識、環境倫理、環境支援行動に関する項目を取り上げる。

III. 地域空間→環境の空間性

地域空間に関する項目を取り上げる。

以上にもとづいて、具体的項目に関して「環境計画論」⁴、「環境白書」⁵、NIRAによる「地域問題 300

選の概観にある上位問題の項目」⁶を精読して項目の候補を作成し、観光論文と照らし合わせながら以下のような手順を踏んで項目を作成した。

「観光論」におけるキーワードをこれらの項目に分類していく過程で、類似していると考えられる項目は統合した。そのうち、1.の基本概念や「リサイクル」等の項目で、記述個数が少なくても残した。このように、「観光論」と「環境の概念」を結びつけるために、各「観光論」から抽出された各キーワードが、「環境の概念」の小分類の46項目について該当するか確認した。また、記述的統計量として評価・分析するため、「観光論」のキーワードが「環境の概念」の各項目に該当する場合を「1」とし、該当しない場合は「0」とした。これを集計した結果を表2にまとめた。

表2 「基本概念」に分類される項目とその記述個数

大分類	中分類	小分類	記述個数
基本概念	説明概念	自立性	10
		安定性	10
		循環性	20
		階層性	14
		多様性	8
		加積性	11
		有限性	6
		閉塞性	8
		節欲性	4

表3 「環境の身体性」に分類される項目とその記述個数

大分類	中分類	小分類	記述個数
環境の身体性	知覚	外部空間の知覚方法	23
		心理	31
		志向・欲求	63
		体験・経験	45
	倫理	帰属意識	43
		信仰性	17
		価値観	49
		生活の規範・習慣	49
		責任	13
	環境支援行動	コミュニケーション	31
		合意形成	18
		計画	15
		住民運動	13
		参加	20
		連携	19
		リサイクル	6
		保護・保全	28

表4 「環境の空間性」に分類される項目とその記述個数

大分類	中分類	小分類	記述個数
環境の空間性	要素特性	自然・地理	25
		歴史・文化	79
		風土・景観	20
		エネルギー・廃棄物	10
		人口	30
	権力性	政策	47
		行政	53
		法律・条例	15
		開発	69
	資本性	産業	80
		経済	37
		消費	50
		サービス	71
		労働・所得	35
		情報・広報	88
	公益享受性	税金	10
		交通	41
		医療・福祉	12
		教育	28
		余暇	29

4. 考察

このようにして、得られた結果をもとに、論文を、「掲載誌」と「年度」における数の変遷から、「観光論」全体の傾向を把握した。

続いて、全体の記述個数において、1987年から1995年まで、1997年の記述個数が少ないこと、1996、2000年が記述個数の最大値をとる傾向があることをふまえて、1987年から2001年を3区分した。

表5 年代の3区分と論文数および記述個数

	年度	論文数	記述個数
第1期	1987-1994	16本	197個
第2期	1995-1998	86本	419個
第3期	1999-2001	96本	787個

またこれらの項目による比較および考察をおこなうために、使用頻度を以下のようにして求めた。

$$\text{使用頻度 (回)} = \frac{\text{記述個数 (個)}}{\text{論文数 (本)}}$$

この使用頻度による考察をおこなった結果、以下のよう到大分類ごとにまとめることができた。

4-1 基本概念の項目によるまとめ

全体的に基本概念は、第2、3期における極端な減少があげられた。そのなかで、循環性が安定して扱われており、続いて第3期において、自立性および、階層性の使用頻度が増加している。

4-2 環境の身体性の項目によるまとめ

環境の身体性において、コミュニケーションと志向・欲求が3期を通じて使用頻度が高く、安定していたという。しかし、倫理の項目が全体的に増加傾向にあるなかで、第1期においてのみ責任とリサイクルが、第3期に計画の使用頻度が見られない。さらに、第2期において合意形成の使用頻度が激減している。

4-3 環境の空間性の項目によるまとめ

全体的に環境の空間性の使用頻度は高く、なかでも、中分類である資本性に含まれる項目や、開発、交通といった項目が安定していた。さらに、歴史・文化は、使用頻度が時間を経過するに従って大幅な増加していた。しかし、第1期においてのみ、医療・福祉の使用頻度が見られなかった。さらに、第2期において、エネルギー・廃棄物、法律・条例、税金、余暇といった項目に関する使用頻度が減少してい

る。その反面、行政、教育に関する使用頻度が、この時期に増加している。

5. データの分析

まず数量化Ⅲ類によって、それぞれの「環境の概念」として、項目間の関係を定置する。

各項目における論文の記述個数から、上の表にもあるように、中間の45個以上の12項目によって数量化Ⅲ類をおこなった。この結果は以下のとおりである。なお、分析には、エクセル統計 2000 を用いた。

表6 数量化Ⅲ類の結果に関する表

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.3455	16.78%	16.78%	0.5878
第2軸	0.2883	14.00%	30.78%	0.5369
第3軸	0.2268	11.01%	41.79%	0.4762

このようにして得られた結果から、軸の解釈をおこなった。

第1軸は、上位の項目に「生活の規範・習慣」、「価値観」、「体験・経験」、「歴史・文化」とあり、下位の項目は「消費」、「産業」、「サービス」となっている。この軸は、「**文化の商品化と経済活動**」とすることができる。第2軸は、上位の項目に「政策」、「行政」、「開発」とあり、下位の項目は「志向・欲求」、「体験・経験」、「価値観」となっている。この軸は、「**Public-Personal**」とすることができる。第3軸は、「歴史・文化」、「志向・欲求」「政策」「開発」「情報・広報」が上位の項目にあり、下位の項目には「生活の規範・習慣」、「消費」、「価値観」、「産業」、「サービス」がきている。この軸は、ゲスト・ホスト間の「**接遇**」と解釈できる。

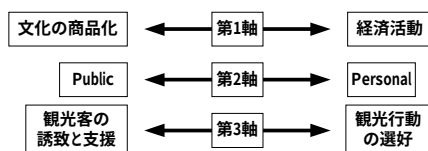


図3 3軸の解釈

また、定置された「環境の概念」としての項目を、クラスター分析による類型化をおこなう。なお、この分析には、SPSS 10.0J for Windows、固体と固体の類似度を表すためには ward 法および、クラスター間の距離を決める方法として平均ユークリッド距離をもちいた。このクラスター分析によって得られたデンドログラムを、下のようにクラスタ化した。この際、ク

ラスタは 9 に分類されたが、その所属する論文数から、実質的には 5 つに分類され、この 5 つのクラスタ以外は、「その他」としてまとめ、除外する。

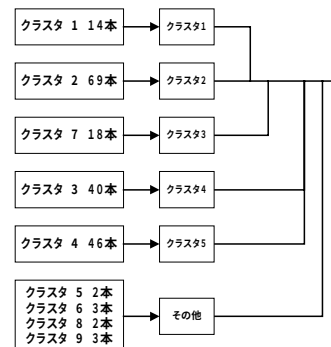


図4 デンドログラム

また、このように分類されたカテゴリに対して、以下を参考にして各カテゴリを解釈した。

- ・ 所属する論文の傾向
- ・ 数量化Ⅲ類にもちいた 12 項目の記述個数

カテゴリ 1: 観光地の民族性

カテゴリ 2: 観光地の地域性

カテゴリ 3: 交流

カテゴリ 4: 観光開発

カテゴリ 5: 観光の需要と供給

6. 観光論の変遷

観光論の変遷として、12 項目による数量化Ⅲ類のサンプル得点の分散図に表したものが以下の図である。

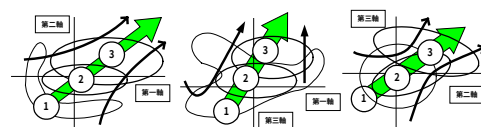


図5 論文の3区分による変遷

これらの分散図より、第1期から第3期への時間の変遷において、第3象限から、第1象限に向かう傾向が得られる。これを解釈された軸および、クラスター分析のクラスタの分布図からまとめた。

軸による変遷は、以下のように変遷している。

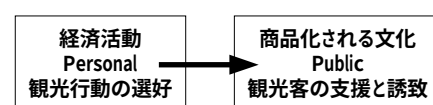


図6 軸の変遷

同様に、分散図とクラスタの比較から、カテゴリの

変遷としてまとめた。

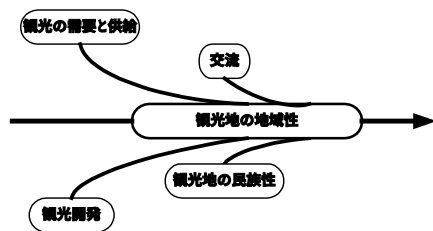


図7 クラスタの変遷

7. まとめと展望

(1) まとめ

観光論は環境の空間性に関する項目を中心に、なかでも資本性の項目群や、開発、交通、また環境の身体性においては、コミュニケーションや志向・欲求、といった項目を取り扱っている。続いて、責任、リサイクル、医療・福祉といった項目がこの時期から遅れて取り扱われた。さらに、歴史・文化、行政、教育といった項目がこの時期から重点的に扱われ始めるが、エネルギー・廃棄物、法律・条例、税金、余暇に関して、取り扱いが困難であった。その後、計画を取り扱っていないものの、基本概念のなかでも自立性および階層性が再び取り扱われている。また、基本概念や合意形成の項目においては、第1期に取り扱おうと試みたが、吸収するのは困難であったため、結果としてブーム的な取り扱いであった。

(2) 観光原論からのまとめ

本研究の対象のなかで、観光学に関する論文は、鈴木⁷と、末石⁸による2本の論文があげられる。

まず、鈴木⁷の論文より、観光理論は「観光のしくみ」を理解するための理論であり、この「しくみ」が人間環境系として観光を捉えようと試み、環境とその概念を共有したと考えられる。さらに、**観光における人間環境系として人々の間で合意形成ができておらず、さらには、末石のいう人間環境系の視点の導入は時期尚早であったといえる。**これが、基本概念や合意形成の項目が結果としてブーム的な取り扱いであったことに対する解答にもなっている。

また、末石⁸の論文から、地域における人の循環とそこから拡散するエネルギーの取り扱いとみなすことができ、それらの効果を得るために、観光のしかけとしてどのようにして人を循環させるか、ということに焦

点があるといえる。

また、環境とは、本来、衛生や公害といった「負」の属性を取り扱う「影」の部分から、エコツーリズムといった「光」に近い部分まで見ることができる。つまり、環境は「光」も「影」も見ること可能であるが、観光は「光」の部分しか見ようとしていない。言い換えるならば、「光」のない観光は存在しない。原論としてとりあげた論文には、「光」によって生じる「影」に関する記述がみられないほど、観光の放つ「光」はまばゆいのである。さらに、観光によって生じる「影」を取り扱ったとしても、なぜ「光」が届かないのか、という「光」のための「影」としか扱われない。原論ですら見落とすなかで、この境界を見定めることは容易ではない。しかし、観光が本当に人間の幸福、喜び、生きがいであるならば、「影」の境界を見定める必要がある。

(3) 展望

観光におけるプログラムの重要性が課題としてあげられている。このプログラムとは、人を循環させるものであるから、人を物質としてみなすならば、環境の概念に対する課題でもあるといえる。このような課題に対するひとつのヒントとして、エベレストにおける清掃登山を繰り返しおこなっている登山家の行動があげられ、さらにその先には、観光の原型ともいわれる巡礼の構図があると考えられる。

<参考文献・引用文献>

¹ 山田全紀・平塚彰：「環境」の概念の東西比較研究について -K. 西田と M. シェラーの場合-環境システム研究, Vol. 22, pp109-114, 1994

近藤隆二郎：「環境システム研究」における環境の理念・環境論の多様性と展望, 第28回環境システム研究論文発表会 講演集, pp45-54, 2000

² 末石富太郎+環境計画研究会：環境計画論, pp13-14, 森北出版, 1993

³ 青木陽二：環境知覚に関する最近の研究動向, 環境情報科学, 22-3, pp74~86, 1993

⁴ 末石富太郎+環境計画研究会：環境計画論, pp13-14, 森北出版, 1993

⁵ 環境省：環境白書, 2001

⁶ NIRA：地域問題 300 選の概観,

⁷ 鈴木忠義：「観光学」を求めて, 観光研究, 日本観光研究者連合, No. 1.2, pp2-5, 1987

⁸ 末石富太郎：Tourism Studies の規範化に関する研究, 旅の文化研究所研究報告, 旅の文化研究所, No. 4, pp15-30, 1996